



仏さまの願いと

お母さん

東井義雄



響流書房・南御堂

序

第一章 仏さまの願いとお母さん

お母さんのお乳はいのちのおるさと
家庭に灯を...

よろこびのごとばを —お母さんのロー
汚れたパビン —「耳」への期待 —

お弁当はお母さんの心の手紙

“お父さん”が生かされている家庭
S君の“やる気”に火を点じたもの

“態度で示す”お父さんを中心に
上農は「土」をつくる

勉強が大切で他はどうでもよいのか

第二章 仏さまの教えと教育

どの子も光るものをいただいている

光が子どもを見せてくださる

三郎君もほんとうは悪い子ではなかった
悪い子だけが悪いのではなかった

川にそって岸がある

自分は自分の主人公

身自らこれに当たる代る者あることなし
「モンジャナツテヤジャナイ」

スイッチを入れなければ灯はともらない
いちようの寒のお年玉

太陽は夜が明けるのを待つて昇るのではない

あとがき

仏さまの願いとお母さん

東井義雄

序

年少少女たちの自殺が相次いでおります。私には、死を選ぶ年少少女たちが、何か今、必死に叫んでいるような気がします。「生きるということは、いったい、どういうことなのか。なぜ生きねばならないのですか。お父さん、お母さん、そして先生方が生きておられる姿から学ぼうと思っても、生きなければならぬ意義が、ちっともわからないではありませんか。それに、どうしてあなた方は、生きる意義も見出せないで迷っている私たちの方を見てくれないのですか。教育はいつた誰のためのものなのですか。できない子をできるようにし、道に迷っている者に道を教え、自信を失っているものに自信を育て、人間に生まれさせてもらった意義に目覚めさせてくれるのが教育ではないのですか。どうしてあなた方は、生きる道に迷っている私たちに、生きるよろこびを育てようとしていないでいてくれなかったら……』というような顔をなさるのですか。教育は、生きがいも見出せず、勉強も手につかないでいる私たちのためにこそあるのではないですか」と、必死に叫んでいる気がするのです。

つまり、子どもたちは、「罪悪深重・煩惱熾盛の凡夫」「一文不知」の勉強のできない「ともがら」「地獄一定」の自分が自分でもならない「やから」を救うことができなければ、「仙」とは呼んでくれるなどという「真実の親」を必死に求めている気がするのです。

こういうとき、難波別院では、毎月発行なさっている『南御堂』に「教育欄」を設けてくださり、私のような者に、二年間もその執筆を言いつけて下さいました。何とかその尊い願いにお応えしたいものとひたすら努力してまいりましたが、定められた字数の中で、ご趣旨にお応えすることは、私の力柄ではむずかしいことで、終始申しわけなく思っていました。

しかるに、この度、二十一回分の拙稿を一冊にまとめて出版したいとの思召し、舌足らずの文章ばかりですが、お子さんの教育の問題を通じて、この本が、真実のみ觀の願いとみ教えに出遇うていただくよすがになり、教育の世界に広大のお慈悲が生かされ、子どもたちが救われるご縁にでもなれば、こんなうれしいことはございません。

それにしても、このご縁をお恵み下さり、子どもの世界を築いて下さる別院に、心からお礼を申しあげたいと思います。合 掌

昭和五十四年二月十一日未明

東 井 義 雄

第一章 仏さまの願いとお母さん

お母さんのお乳はいのちのふるさと

次の詩は、小学二年生の男の子が書いたものです。

おかあさん

おかあちゃんにおおてもうた。

手をのばしたら

むねのところにさわる。

ふくの下に

おちちがあるんやな。

ひとりでに

わらえてくる。

よだれをちゅっと

すいあげた。

この子はまだ小学二年生ですが、絶対、問題少年なんかにはならないでしょう。「いのちのふるさと」を育てられているからです。H市の問題少年の施設で仕事をなさっている先生のことばというのを聞かせてもらったことがあります。

「おかあさんの胸に抱かれてお乳をいただいて育った子どもは、正常な少年に戻すことができます」

「子守歌を聞かせてもらって育った子どもは、正常な少年に戻すことができる」

「昔話や童話を聞かせてもらって育った子どもは、正常な少年に戻すことができる」

ということです。

このことを思い出す度に思い出せるのは、少年院に収容されている少年たちの歌です。

ふるさとの夢みんとして枕辺に

母よりの文積みあげて寝る

われのみにわかる拙き母の文字

友寝たればしみみと読む

いれずみの太き腕して眠りいる

友は母さんとおつばやきにけり

この少年たちも道をまちがえたのです。そして「少年院」なんかに送り込まれてしまったのです。でも、三人とも、「いのちのふるさと」をもってくれているようです。きっと、ほんとうの道に立ち戻ってくれるでしょう。

船を造るのに、一番大切なことは、たとい航海中大嵐にであい、おそろしい横波などくらくらって転覆しそうになっても、もとへ戻る力をどうしてみつけるかということだと聞いたことがあります。人間にも、しっかりとこの「復元力」をつけておいてやらなければなりません、どうやらこの仕事は、お母さんが、あたたかい豊かな胸に赤ちゃんを抱いて、お乳をあげてくださるあたりに、重要な秘密があるようです。



お母さんのお乳には「どうか丈夫な、そして心豊かないい子を育ててやっておくれ」という、「いのちのふるさと」からお母さんへの願いがこもっているのでしょう。栄養分析をしてみても見つからない不思議な願いがこもっているのでしょう。

数年前のことです。Hという町の十九歳の未婚の母親が、生まれたばかりのわが子の鼻を圧して窒息死させ、その首をしめ、すっぱだかにして寒中の円山川に投げ捨てた事件がありました。ところが、その冷酷・残忍な母親自身、双生児の一人として生まれて捨て子にされていたのを拾われ、育てられたのだそうですが、やはり、お母さんの胸に抱かれたことも、お母さんのお乳をいただいたこともなかったのです。「復元力」としての「いのちのふるさと」を育てられこなっていたのです。

家庭に灯を...

近ごろ、子どもたちが、家へ帰る楽しみを失っているようです。私の地域だけのことではないようです。週日、福山市の先生方が調査なさったものを見せてもらったのですが、あの辺でもそういう傾向が顕著になってきているようです。これは、ぜひともお母さん方にお考えいただかねばならない大問題だと思うのです。家庭をいいところにするのは、家族みんなの責任ですが、お母さんはその最高責任者であられるからです。

十年くらい前までのお母さんは、ちゃんとそのことをお考えになって、子どもを待ってやっていくできました。次の、二年生の女の子の作文をご覧ください。



きょうもおかあちゃんとはただだろうなとおもいながら、がつこうからかえつてくると、やつぱり、うちの大と（入口の大きい戸）がしまっていました。（入口の大戸がしまっていることは、お母さんが留守だという信号みたいなものです）わたしは、つまらないなあとおもつて、大とをよいしょとあげました。（お母さんが留守だと思うと、入口の戸をあげるのにさえ、お年寄りみたいに。『よいしょ』とかけ声をかけなければ戸が開かないのです）すると、わたしはびっくりしました。にわじゅういっぱいになにかいてあります。よくみると、それは、けしずみでかいたおかあさんのかおです。かおのところのそばに「おかえり、やき山のはたにいますよ」とかいてありました。（何というすばらしいお母さんでしょうか。お母さんのいない家に帰ってくる子どもの心を、ちゃんと知っていらつしやるのです。『つまらないな』と子どもがつぶやくまでに、もうそのつぶやきを聞いていらつしやるのです。まるで仏さまのようなお母さんのお心です）わたしは、けしずみでかいたおかあさんがまっついていてくれたので、さみしくないとおもいました。（それはそうです。もうさみしくありません。お母さんの広大なあたたかいお心の中につつまれているのですから……）



わたしは、かばんをおろしてから、けしずみを一こもつてきました。そして、おかあさんのかおのところのそばに、小さいわたしをかきました。リボンをつけたわたしにしました。そしておかあさんのほうに手をのばして、かたたたきをしているところになりました。「かあちゃん、かたたたいてあげるよ」とかきました。ほんたいがわに、「あしたもまっついてね」とかきました。すっかりかきあがつたので、手をあらつておやつをたべてから、わたしは、おかあさんのかおのところのそばで、ゆうがたまで、いっぽんふみをしてあそびました。



昔のお母さんだつて忙しかつたのです。いつも家にいて、わが子の帰りを待っていてやることはできなかつたのです。今よりも、くらしはもっとときびしかつたからです。でも、家庭というところがどういふところでないか、その中で、主婦・母親は何を愛すべきかを承知していただくさつたのです。「何千の灯あらんも、われを待つ灯は一つ」といふことを思いだします。街に、どんなに色とりどりの誘惑の灯があつても、お母さんのかかげられる「われを待つ灯」の力には及びません。でも、家庭にその灯がないと

なると、子どもたちは誘惑の灯に誘われていってしまいます。お母さん方どうか家庭に「灯」をにかけてください。

よろこびのことばを ―お母さんのロー

私は、四十年間、子どもの作文に親しんできましたが、子どもの書いたものを読んでいると、いろいろ教えられ、考えさせられることがあります。

次ののは、五年生の男の子の日記です。

◇

ぼくのお母さんの叱り方は、大へんおもしろい叱り方です。ぼくには一言ものをいわせないで、ペラペラペラと二十分間くらいつづけて説教します。まるで「**ビルのたてこど**」という映画でみた「キカンジユウ」のようです。ぼくはその間、よく聞いているようなかっこをしています。お母さんは叱ってしまおうと、いつでも「わかったか？」といいます。ぼくは何もわかりませんが「はい」ということにしています。

先生、きょうの日記のことは、お母さんに話さないようにしてください。

◇

というのは、教育熱なお母さんほど、お口が「キカンジユウ」になる傾向が強いようですが、「キカンジユウ」はあまり教育力を持たないことを、子どもが教えてくれている気がします。

別の五年生の男の子なのですが、この子のお母さんも「キカンジユウ」が多いので、だんだん、家へ帰る楽しみを失っていました。ところが、ある日、とんで帰りました。その日は、テストの点数が九十八点だったからです。きょうはきつとほめてくれると彼は思ったのですが、お母さんの口からとんでできたことばは、「なぜこんな簡単などころをまちがってしまったの？なぜ百点がとれないの？」ということばでした。その子ばかりしてしまいました。ところが、次のテストで待望の百点をとりました。彼は、きょうこそとんで帰るなり「お母さん、お母さん、きょうは百点だよ」と叫びながら家へとびこみました。お母さんは答案を受けとって見ておられましたが、「きょうは問題がやさしくて、ほかの人もみんな百点だったんだよ」ということばが返ってきました。その子は、「ぼくは腹がたって腹がたって仕方がないので、紙にローマ字で『バカ』『バカ』と書いて壁にはりつけました。お母さんはローマ字が読めないからです」と書いていました。子どもは「喜びのことば」を期待しているのに、お母さんの口から、「喜びのことば」を期待することは、なかなかむずかしいようです。

次ののは、四年生の女の子が、成績の通信簿を見せる場面を書いたものです。

◇

お母さんは受けとって見ておられましたが何も言われません。わたしが「お母ちゃん、はやく何とかいうて」

というと

「たいしたことはない」

といわれました。わたしはがっかりしてしまいました。

◇

この女の子も期待を裏切られてがっかりしてしまっています。お母さん方、どうか次のお父さんの「口」に学んでください。

◇

「うんこれならよからう。お父さんの四年のときより上等や」といわれました。ぼくはうれしくなって、これからは毎日勉強するぞとけっしました。(四年 男)

汚れたパンツ ―「耳」への期待―

私は、校長を勤めさせていただいている間、一年生担任をどの先生にお願いするかということを、新学年を迎える際の重要課題としていました。習字のとき、起筆を誤ると字全体がだめになってしまうように、一年生のスタートの狂いは、なかなかとり戻せないからです。私自身、それが恐ろしくて、どうとう一年生だけは担任せずに終ってしまったほど大切な一年です。

一年生担任として何よりも大事なことは、子どもの胸の中のつぶやき、ことばにならないことばを聞きとる「耳」を持たなければなりません。ですから私は、このことを基準に候補を絞って一年の担任をお願いするのを例にしました。

ところが、そういうことで候補を絞っていくと、毎年。不思議なことに女の先生になっていくのでした。考えてみると「女」の人には仏さまは特別の願いをかけていらつしやる気がします。それでお母さんになってもことばをもたぬ赤ちゃんの泣き声を聞きわけることができるのではないかと思います。

でも、女の人でも、その仏さまの願いを忘れていると失敗するようです。ある年も、せっかくお願いした一年生の先生が、六月頃でしたが「一年生担任の資格ございません。取り返しのつかぬことをしてしまいました」と泣いて訴えてくるのです。その組には、入学以来一度ものをいわないという女の子がいました。その女の子がある朝、教室を飾る花をもってきたのですが、黙って先生の机の上へおいていたのです。その日は他の子も次々に花をもってきて先生の机の上へおいていたのです。先生はその中で一番美しいの花びんに立て、他はバケツの中に潰けました。その女の子はバケツ組になってしまいました。あくる日もそのあくる日も、花は立ててもらえませんでした。そのうちに、花は汚れていききました。そしてとうとう花は捨てられてしまったのです。その子の落胆ぶりがあんまりひどいので、お母さんが先生にその事情を話したのです。

私は、仏さまなら虫けらのつぶやきでもお聞きになれるそうだが、人間の悲しき、私自身ひどいまちがいをやり続けてきたことを話して慰め、「耳」を大事にしましょうと、その先生を励ましたことでした。



ある日、その組の男の子がおなかをこわしてパンツも服も汚してしまいました。学校ではそういう時のために、いつも洗濯したのを三着ばかり用意してもらっていましたので、きれいに処理してはきかえさせてやってくれました。ホッとして担任が職員室に帰ってきたと思うと、学級の子がかけこんできました。今のをまた汚して泣いているというのです。すぐとんでいってみると、お便所へいくのが持てず、途中で汚してしまって大声で泣いているのです。「泣かんでもいいの、元気だしなさいよ。あんたのおなかの中にあっては体のために悪いものが、みんな出ちゃったんだから、先生やってうれしinyやで」と自分も泣きながら子どもを励ましてやってくれているのです。偶然通りあわせた私は、すっかり感激してしまいました。せっかくはきかえさせてもらったパンツを汚してしまい、泣くよりほかにことばもない、そのことばにならないことばが聞ける先生でなければ、この励まし方ではないぞと感激してしまいました。すばらしい「耳」だなと感激しました。

お弁当はお母さんの心の手紙

春の遠足に五年生の子どもについていったことがありました。昼になって、子どもたちが弁当を開いたのを見てまわって、私はさびしくなっていました。あちらにもこちらにも、町のおすし屋さんで買ったおすしを持たせてもらっている子がいたからです。遠足の弁当くらいはお母さんの心のこもったものがほしいと思いました。

間もなく、六年生の修学旅行が行なわれることになりました。計画をたててもらったのを見ると、一食分弁当持参ということになっています。私はお母さんたちを集まってもらって頼みました。「忙しいですが、生涯の思い出になる修学旅行です。いつもより早く起きて、ご飯をたいて、しっかりと心をこめて握ったおむすびを持たせてください。それから、おむすびにこめた心を手紙に書いて添えておいてやってください」と。

昼は大阪空港に近い会社でとらせてもらいました。子どもたちは弁当を開くと歓声をあげはじめました。大きなおむすび、それに手紙。手紙を持って飛びまわる子どももいます。いっぱい涙を浮かべて手紙を読んでいる子どももいます。森木君は涙組でした。他の子が食べるようになって、涙をぬぐおうともせず読みつづけていました。読み終ると、ていねいにたたんでたいせつそうにポケットに納めました。見せてくれるように頼むと、「校長先生、あげるんところがうぜ。すぐ返してよ」と念をおしてから見せてくれました。あとで旅行記を見せてもらったのですが、森木君は、その晩、奈良の旅館で、寝床の中にはいつてから、もう一度お母さんの手紙を読み返し、「お母ちゃん、無事に奈良の旅館に着き、今、寝床の中で手紙を読み返したとこや。明日も気をつけてがんばるから、心配せんでもいいよ」といい「おやすみ」とつぶやいて眠りについたことを書いていました。

守本恵ちゃんという女の子の旅行記には、「弁当の包みを開いたらおむすびがでてきた。手紙がついていた。それを読んでいるとお母さんの顔が浮かんできた。するとおむすびだけでなく、私の着ている服も、忙しいお母さんが心をこめてぬってくださった服であることに気がついた。飾りについている刺しゅうも、一針一針お母さんの心がこもっているのだと思うと私は、一二四人の六年生の中で、わたしが一番しあわせ者だと思われてきた。そして、私もお母さんになるときには、お母さんのようなお母さんになりたいと思いました」と書いてありました。

修学旅行の弁当に手紙を添えることは、私が職を退いてからも、ずっと続けられているようです。

田村佳子ちゃんが弁当の包みを開くと「せめて佳子が一年生に入学するまでは生きていたいといいながら、そのねがいさえかなえられないで亡くなられたお父さんです。あなたの修学旅行に出かける姿を見られたら、どんなに喜ばれるでしょう。どうか、お父さんといっしょに修学旅行のお勉強を、りっぱにやりとげてください」というお母さんの手紙といっしょに、亡くなられたお父さんの写真が出てきました。

佳子ちゃんは、手紙とお父さんの写真を抱きしめて泣いてしまいました。佳子ちゃんの目に、六年生になるまでのお母さんのご苦労が、つぎつぎに浮かんできました。佳子ちゃんの修学旅行は、お父さん、お母さんといっしょの旅行になったことはいまありません。

“お父さん”が生かされている家庭

問題の子どもは、問題の家庭で育てられているといわれています。その問題の家庭の中でも、お母さんが子どもの前でお父さんを馬鹿にしたり、罵ったり、「そんなに怠けているとお父さんみたいになっちゃいますよ」などと、お父さんを、だめな人間の見本のように子どもに言い聞かせるといようなことで、お父さんの存在の影を薄くしている家庭から問題の子どもが現われているといわれています。

お母さん方、どうかお父さんの存在を大切にしてください。ほんとうに賢いお母さんは、子どもが三つの質問しても、三つとも教えてしまわないといっています。「この三つの問題、お母さんからはわからないわ。今夜お父さんがお帰りになったら尋ねておいてあげてね」と、さりげなく、お父さんの存在を意識づけようとなさるといいます。子どもから、何か買ってほしいとねだられたときにも「じゃ、お父さんと相談しとくわね」と、お父さんを意識づけようとなさるといいます。

それでは、不幸にして、お父さんを亡くされたような家庭ではどうすればいいのでしょうか。次の亮太君の作文をご覧ください。



ぼくのお父さんは、ぼくの小さいときに死にました。それでも、とうちゃんはどこかでぼくのことを見とるんやとかあちゃんはいいいます。

かあちゃんはおこってぼくの頭をたたくとき、「これはとうちゃんのかわりにかあちゃんかたたくんや」といいます。たたかれるときは、ぼくがいうことを聞かないときか、かあちゃんがかんしゃくをおこしたときです。



かあちゃんはいつもはたらいてるので、うちへ帰るのがおそくなります。父ちゃんがいないので、そのぶんもはたらくからです。ぼくが夕方、戸口のところでまってる、帰ってきて頭をなでてくれます。ぼくはうれしくなって「父ちゃんのぶんもなでて」といいます。すると、かあちゃんは「よし、よし」といってなでてくれます。

この間のばん、ぼくがしゅくだいをやっていると、かあちゃんが「亮太は勉強がすきになったでええな」といいました。「ちがう、きらいや」というと「勉強のきらいなもんはえらいもんになれせん」とかあちゃんがいました。「へえ、そんなら、おらの組では健ちゃんがいちばんえらいもんになるんかよ。なら、おら、えらいもんなんかなりたかねえ」と口ごたえをしました。健ちゃんとは、勉強はできるかしんないが、いばるからぼくはきらいです。すると、かあちゃんはおすつとしてしまいました。ぼくはだまっていきましたが、かあちゃんがものをいわないので、だんだんつらくなりました。ぼくはかあちゃんのところへ行って「かあちゃん、たたいて」といって頭をだしました。するとかあちゃんは「もうええから勉強しな」といいました。「そんなら、とうちゃんのぶんたたいて」といいました。そしたら「よし」といって、かあちゃんはわらいながら、ぼくの頭をひとつコツンとたたきました。ぼくはうれしくなって、また勉強をやりました。

ぼくはかあちゃんが大すきです。

◇

母一人子一人の亮太くんの家庭ですが「お父さん」がちゃんと生かされています。

S君の“やる気”に火を点じたもの

大阪のある小学校で、三年生の子どもたちを相手に、作文の授業をさせてもらう機会がありました。ちょうどその日が「父の日」でもありましたので、私は、子どもたちに「お父さんの作文を書いてもらおうと考えました。それで、「みなさん、目を閉じてお父さんのことを考えてみてほしいんだ。どんなお父さんの姿が目に見え浮かんでくるかね?」といったのです。すると、やんちゃやそうな一人の男の子が「週刊誌もって……テレビの前で寝ころんで……お母ちゃんに叱られてるところが浮かんでくる」というものですから、「ぼくもそうや」と、大さわぎになってしまいました。

昔の子どもは家族みんなで一緒に働きましたので、お父さんのご苦労がよくわかったのですが、今は働きの在り方が変わってしまい、お父さんの真剣に生きる姿を見ることができなくなっているようです。これは、子どもたちにとって、不幸なことだと思います。

S君のお父さんは、会社の警備員さんでした。週三日は、夜通し徹夜で会社の警備にあたります。残りの日は、昼間、門衛で警備にあたります。

S君は、お父さんのそういう仕事をはずかしいと思っていました。だから友だちがお父さんのことを話すときでも、口をつぐんでしまうS君でした。

ところが、お母さんが偉い方でした。ほんとうのお父さんに触れさせるため、吹雪の夜、徹夜で会社の警備にあたられるお父さんのために、あたたかい弁当を届けるよういつけられました。



S君が会社に着いたとき、吹雪の中、電池をともして見まわりから帰ってこられるお父さんとパツパツであつたのです。「お父さんて、たいへんだな」と、目が覚めた気がしたといます。

それからのS君は、弁当運びの役目を進んで引き受け、勉強の用意をして家を出るようになりました。そして、門衛のお父さんの机で勉強するようになりました。「自由貿易と保護貿易」「白人問題・黒人問題」……どんな質問をしてもピタリ急所をついた答をしてくださるお父さんでした。それに、一緒に勉強していても、見まわりの時刻がくると、「遅うならんように帰って寝ろよ」とあたたかいねぎらいのことばを残し、あかりをともして見廻りに出ていかれるお父さんでした。誰が監督しているわけでもないのに、お父さんって、責任感が強いんだな、とお父さんの偉さに目を見張るようになりました。

ある晩もそうやって勉強して帰っていったとき「あんだ、二時間もこの寒いのに何しとつたの?」「お父さんと勉強しとつたんや」「まあ、あんな寒いところで、体も何も冷えてしまったやろ、早くこたつにあたりなさい、お母さんすぐミルクぬくめてあげるから」とお母さんがいわれたとき、「いいや、ぼく、まだ勉強の続きが残つとるんや」と、S君は机に向かうのです。

そのときのことをS君は「吹雪の中を見まわりに出かけていった父のことを思うと、寒さなんかなんともなかった。父に負けてはならんと思ってぼくは勉強を続けた」と日記に書

いています。

お母さんの配慮によって、お父さんのきびしい生きざまが、S君に火を点じたのです。

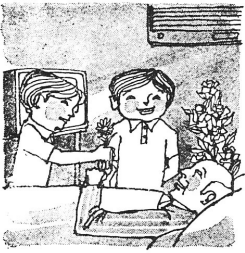
「態度で示す」お父さんを中心に

お母さん方に、子どもの小遣い銭をどう考えどう指導すべきだろうか、ということについて話しあってもらったことがありました。

たいていのお家は、低学年では週給制、高学年では月給制ということのようでした。決められた予算の中で、欲しいものがあってもがまんしたり、考え直したり、買うものをいろいろな面から考えて選択したりすることによって、お金の生活を生きる生き方の勉強を目指しているということでした。

ところが、ふだん、奔放と見えるほど自由でありながら、狂わせてはならないものは、つらくても守りぬくという性格の寛君のお母さんの発言はちよつと違っていました。

◇



私の家は違うんです。私のところも寛の要求で初め月給制でやっていました。ところが何度目かの月給日の日、寛が月給を要求するのを聞いていたお父さんが「お前、月給をやっていたのか。それならすぐにやめにしてくれ」と申すものですから寛は不服です。「だってどこの家も月給やで」「よそはよそだ。うちではやめにしてくれ」とお父さんは譲りません。その晩「月給のよいところもたくさんある。が、わが金だ、わがものだというケチな考えはお父さんはいやだ。お金は誰のものでもない、みんなのものだ。欲しいものがあつたら、みんなで相談して、みんなで買えるように努力しよう。今欲しいものだけでなく、お前たちが大きくなってからのことも考えよう。病気をする者が現われるかもしれない。そのときには何をにおいてもすぐ治せるように貯金もがんばろう。お父さんが一番頑張つて働かねばならないだろうが、お父さんが貰った金だからといってお父さんのものではない。みんなのものだ」と話して聞かせてくれました。ところが、去年の夏、おじいちゃんの胃の手術をしなければならいことになりました。お父さんは「病院が評判がいいというので出かけていき「お金はいくらかかってても、この病院最高の治療を頼みます」と頼み、特等室に入院させました。夏ですので室にクーラーを入れさせ、心が慰むようにいろいろな品を入れ、子どもたちには毎日「町から「市」まで見舞に通わせました。手術が首尾よく終りおじいちゃんやんが退院なされると、私たちの室は畳も建具もオンボロなのに、おじいちゃんたちの室は模様替えし、畳も建具も、テレビまでよく見えるように新品にしました。親類の人たちまでびっくりしてしまったことでしたが、おばあちゃんが、寛に「お父さんによくして貰つて」と泣いて話しておられました。寛がお父さんに「お父ちゃん、おばあちゃん泣いて喜んでおられたよ」と話していました。「寛、お金というものは有難いものだ」お父さんはそれだけしか申しませんでした。今ではおじいちゃんもおばあちゃんも、わたしも子どもたちも、このお父さんを絶対信頼なんです。そういう次第で家では月給制はやめになりました。

◇

みんなシェーンとして聞かせてもらったことでした。どういうやり方にも、それぞれ長所短所があるでしょうが、大事なことにについては「家ではこれだ」というものを持って下さり、それを口で教えるだけでなく、このお父さんのように、「お金というものはこういうふうに使うものだ」と、「態度」で示して下さることが大切ではないでしょうか。

上農は「土」をつくる

百姓さんのことばに「下農は雑草をつくり、中農は作物をつくり、上農は土をつくる」というのがあります。いいお百姓さんは、いい「土」をつくることによって、作物が、おのずからいい作物に育たずにおれなくなさるといいます。

これは、子どもの教育にもあてはまることです。最近の青少年の荒廃ぶりは、私たちおとなの荒廃ぶりと、密接にかかわりあっているように思われてなりません。今から五十年前ばかり前、インドの山奥の狼の住むほら穴から、二人の人間の子どもが発見されました。狼が、人間の赤ん坊をさらって育てていたのです。人間の世界に連れ戻され、熱心な人間の教育が施されたのですが、とうとう人間らしくなり切れずに亡くなってしまったことを、J・A・L・シング著『狼に育てられた子』（福村出版刊）は記録しています。せっかく人間に生まれさせていただけでも、狼が、狼のくらしの中で育てると、狼のようになってしまいうらしいのです。

庄ちゃんといういい子がいました。わざとらしさがなく、明るく、心豊かな、ほんとにいい子でした。その庄ちゃんが五年生になったとき、私が担任することになり、庄ちゃんがそういう子に育たずにおれないわけが、わかつた気がしました。家族の皆さんが、庄ちゃんをそういう子に育てる「土」を耕やしておられたのです。庄ちゃんのある日の日記をご覧ください。

◇

おじいちゃんは、いつでもおねんぶつをと覚えておんなる。でも、足がわるいのでお寺へまいれない。それで、きょうもまたぼくがおじいちゃんのかわりにお寺へまいり、せっきょうを聞いてきた。おじいちゃんはきょうもものすごく喜ばれた。「お前が聞かせてくれるなんて、夢にも思わんことだった」と喜んでおられた。ぼくもうれしくなってきた。

うちでは、あした、家の敬老会だ。みんなでごちそうをつくって、おじいちゃん、おばあちゃんにお礼をいうことになった。ごちそうといっても、お金のかかるごちそうではない。お母ちゃんが料理教室でツカダ先生から習ってきた野さいのごちそうだ。

おじいちゃんは、いつも、ごはんをたべるときおがみなる。ぼくたちは何も思わんと何もしないが、おじいちゃんは、ごはんでもおがんでたべなる。うちのおじいちゃんはえらいおじいちゃんだ。



きょうは、夕ごはんをたべながら、家の者みんなが毎日するしごとをきめた。ぼくのしごとは、雨戸をしめたりあけたりするしごとにきまった。ごはんが終ると、おばあちゃんが「雨戸屋さん、たのんます」といになった。ぼくは「へい」といって雨戸をしめにいった。きれいな星が、空いっぱいにかがやいていた。

◇

ここには「そんなことしてはいけません」「こんな成績はずかしいとは思いませんか」と、叱責したり、干渉したりするふんい気は全くありません。「家の敬老会」がこうやり方で行なわれるふんい気。家中の者が仕事を分担しあっていくふんい気。お念仏に耕やされたおじいちゃんの人柄……。それが庄ちゃんを庄ちゃんにしているのです。

勉強が大切で他はどうでもよいのか

汽車の中で、ある先生から送っていただいた本を読んできました。その本に次のような話がありました。

◇

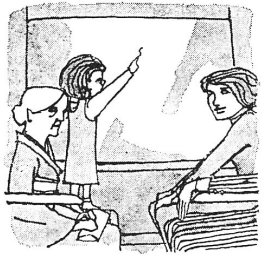
ある国立大学をいい成績で卒業し、きびしい採用試験もいい成績でパスしたお嬢さん先生が、ある小学校に勤めることになりました。その校長先生は立派な方で、この先生を人間としても先生としても立派な教育者に育てあげたい。そのためには、下宿も信用のできる立派な家を……と探して探されました。さいわい、いい家が見つかりました。大きい家でご主人も奥さんも立派な方です。二人の女の子のためにも女の先生がいてくださるならありがたいことです。いつまでいていただいてもいいです、ということになって、校長先生もホッとされました。

ところが、一学期が終ったとき、奥さんが校長先生を訪ねてこられ、如何にも言いにくそうにして、下宿をどこかへかわっていたみたいです。「男の人でもたびたびやってくるのですか」と尋ねても「いいえ、そういうことはありません」といわれる。「校長としても先生を育てる責任がありますので問題があればどうか教えてください」といわれて、奥さんが、言いにくそうにして語られたことは、寝床は万年床、下着は脱いだところへ脱ぎっ放し、洗濯も掃除も片付けもされない。これでは女の子のためにもよくないと主人も申しまして……ということだったのです。

◇

勉強さえしつかりやっていい大学に進んでくれれば、ほかのことは何もいという家庭で、こういう困ったお嬢さんが育ってしまったのでしょうか。

読みながら思い出しておりましたのは、私の知っているある女子高校生です。中学でも成績はトップだったと聞いています。高校では卓球部にはいつているのだそうですが、日が暮れてから疲れて帰ってきます。夕食・入浴が済むと三時間ばかり仮眠するそうです。仮眠ですから寝衣に着がえることはありません。そして朝四時頃まで勉強、そしてまたしばらく仮眠、七時にはバスに乗らなければなりません。洗顔・朝食を済ませるとバスの乗り場までかけつけねばなりません。そういう毎日をくり返しているというあの高校生も、どうやら下宿を追い出されるお嬢さんになりそうだな、と思いました。



そんなことを考えながら読んでいるうちに汽車がある大きい町の駅に着きました。それまでひっそりしていた車内が急に混んできました。私の席のところにもあわただしく三人が席をとりました。私の前には三歳ぐらいの賢そうな女の子、くるぶしまでもある赤い長い服の女の子、隣りはお婆ちゃん、その前、つまり私の隣りはお母さんが腰かけました。女の子が窓ガラスの曇りに気がついたようです。靴のまま席にあがって曇ったガラスに指で字を書きはじめました。お婆ちゃんが「靴を……」と注意されかけたとき、お母さんのきびしい声がピシリとお婆ちゃんの注意を制しました。「お婆ちゃん！今、お勉強しようとしているんです。黙って見ていてやりましょうよ」という声でした。ああ、ここにも、勉強さえす

れば、他のことはすべてゆるされる女の子が育てられようとしていると、私は、気がもめて仕方ありませんでした。

第二章 仏さまの教えと教育

どの子も光るものをいただいている

M君という子どもがいました。成績はいいのですが、人づきあいが下手だというのか、友だちがありません。役員の選挙があっても、彼より成績の悪いのがたくさん票をもらうのに、彼には一票もないのです。私自身、どうも彼を好きになれないのです。担任ともあるうものがこういうことでは……と考えて、いろいろ努力してみるのが、どうしても仲よになれません。

二学期が始まって間もない頃の体育の時間でした。戦後間もない極度に物の不自由なときでしたから、子どもも私も裸足で体育をやりました。それを終り、学校の側で足を洗いました。ところがうつかり者の私は、履物をもっていついていませんでした。学校にいつて下駄をとって来ようかなと思いましたが、ずるい私のことです。子どもの背中に負われていうと考えたのです。

「君が通りかかりました。頼むとすぐにかわいい背中をふり向けてくれました。早速負ぶさりました。」「君のやせた肩胛骨と、私の洗濯板みたいにやせたあばら骨がふれあって、阿ともいえぬいい気持ちです。こんなしあわせを味わえるのは小学校の先生だけだろうな、などと考えている中に、「君がヨロヨロッと思うと坐り込んでしまいました。引き返して足を洗いなおし、「こんどは強そうなのが通らんかな」と思いながら立っている前を通りかかったのはM君です。「おい、M君、M君、先生を負ぶって玄関まで連れていってくれや」というと、すぐ背中をふり向けてくれると思ったのですが駄目でした。「しらんです。よう負わんです」冷たく言い放っておいて、さつさと、後も見ず行ってしまいました。「おのれ、こいつめ！」子どもにもふられた無念の思いが胸を駆けめぐります。後も見ずに行ってしまう彼の後姿をにらみつけているとき、急に、M君が偉いやつに見えてきはじめたのです。こういう人間が、あの開戦の御前会議のとき、一人か二人いてくれたら、あの戦争だって避け得たのではないか。そして、こんなにたくさん、お父さんのない子や、ご主人を失った未亡人の方や、一人息子を失って遠方に暮れている老人がなくてもよかったのではないか。いや、これから先だって、この手も足ももぎとられたようなみじめな日本を背負いぬいて再建してくれるのはこういう人間ではないか、などと思いはじめると、私の学級にM君がいるということがすばらしいことに思えてきました。履物をとってきて足を洗いなおし、職員室に帰ると私は、手紙にその喜びを書き、彼に彼の偉さをどうかますます大切にするように呼びかけずにおれませんでした。

そのときから、私はM君とピタリと通じあえる仲間になりました。通じあう関係、であいの関係なしには子どもをどうしてやることもできません。教育の仕事は成立しません。

どの子もみんな、仏様の願いに願われて生きさせていただいているのです。きつとどこかにキラリと光るものをいただいています。私のようなどこにも光る力を持たない存在でも、汚れた地球が光るように、汚れたまを光に変えてお救いくださるのですから。

光が子どもを見せてくださる

目があっても、見えません。光が見せてくださるのです。

大阪のＴ中学校は、「暴力学校」として、長らく新聞にも書きたてられてきた学校でした。学校経営には自信をもっておいでの校長先生が、次々に送りこまれても、生徒指導の権威者といわれている先生が次々に送りこまれても、その先生方のいのちを張った指導が展開されても、「暴力事件」をなくすることはできなかったようです。

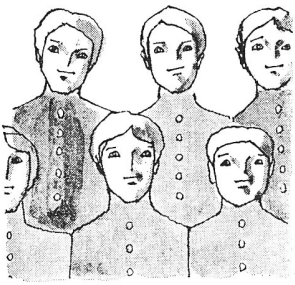
私が、はじめてそのＴ中学校のＰＴＡの講演を依頼されてお伺いしたのは、現在のＴ校長先生がその学校に着任された年の秋でした。もうそのときには、「暴力学校」を感じさせるふんい気はなくなっており、学校の内外が見事に整備されていました。でも、先生方から次のようなことばを聞きました。

「われわれはいのちを張ってやっているんです。朝七時には全員出勤しています。明るい中に帰宅するような仲間は一人もいません。『勤務時間』などについては、この教育はできませんからね。でも、そんなにしていなくても、いつ後から刺されるかわからない問題を今ももっているのです」と。

ところが、過日、再度Ｔ中学校にお伺いしたとき、生徒たちの気持ちのよい挨拶のことばを聞くことができました。三年前にはなかったことです。その上、生徒たちの目の色がいきいきときれいに澄んで輝いているのを感じました。

そこで、校長室にはいるなり「校長先生、生徒さんたちの目がいきいきと澄んできましたね」と申しましたら、「それに気がついてくださいましたか。実は卒業写真の顔が、一年変わってきているのです」と言われるのです。

「どういうところから、こんなすばらしい道が拓けてきたのですか？」と尋ねてみました。



「実はわたしも、はじめ何カ月ほとんど途方に暮れてしまい、さびを投げてしまいたくなりました。何ぶん、出張から帰ってくる私を見つけると、生徒たちが教室の窓から身をつらして、校長の『阿呆！校長の『阿呆！』と罵りながら、昼ですと、給食の牛乳びんを投げつけます。運動場の生徒は石を投げつけるのです。ところが、ある日、ハッと気づかせてもらったのです。わざと、あたらないように牛乳びんを投げてくれているのです。あたらないように石を投げてくれているんです。そのことに気づかせてもらったとたん“この生徒たちも人間なんだ、人間の心を持ってくれているんだ”と、何ともいえない大きな喜びと安らぎを与えてもらうことができました。そのときから“困った生徒”としてではなく“かわいい生徒”、“なつかしい生徒”、という思いで見させていただくことができました。ところが、不思議なことにそのあたりから生徒たちの態度が変わりはじめてくれた気がするのです」と、校長先生がおっしゃるのです。

長い間、多くの人たちから、「憎しみの目」「警戒の目」で見られ続けてきた生徒たちにはすべてを救わずにはおかまいという、大きな光に導かれていらつしやる校長先生の御目

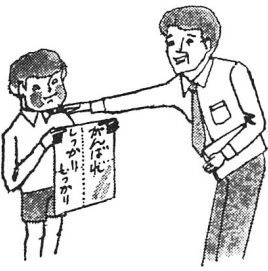
が、ただの御目ではないことが感じられ、校長先生を信じずにはおれなくなったのでしよう。

三郎君もほんとは悪い子ではなかった

三郎君は、一年生入学の頃から末おそろしいやんちゃ者といわれている子どもでした。一年生のくせに女の子の便所のぞきはする。家の金を何千円も持ち出して無駄づかいはやる、授業中も歩きまわってみんなに乱暴をする。といったことのたえない子どもでした。

この三郎君が三年になったとき、井上先生という先生が担任することになりました。井上先生は「人間にくずはない」ということを信じ切っている先生でした。担任した最初の日、三郎君のやんちゃぶりを見ながら「ぼくの子どもの頃とそっくりだな」と思ったといいます。「うちの三年生の男の子とそっくりだな」と思ったといいます。問題の子どもほど、敵・味方を感じわけの感覚は鋭いものです。先生の思いはその日のうちに三郎君にも通じてしまったのです。

先生が「明日から勉強するぼくたちの教室だからきれいにして帰ろうや」と子どもたちに呼びかけたとき、真先に「それじゃ、先生どうきん貸して」といったのは三郎君でした。それを聞くと先生も嬉しくてたまりません。「三郎君はいい子です。どうきんを貸してくれなんていつてくるんです」と、お母さんに手紙を書きました。お母さんは感激してしまいました。「いい子」だなんていつてもらったことがなかったからです。早速どうきんを縫ってやってくれました。



翌日、先生にどうきんを見せようとしてびっくりしたのは三郎君でした。「がんばれ、しっかり、しっかり」とどうきんに太いしゅうがしてあったのです。「君すばらしいどうきんをもっているじゃないか、こんなすばらしいどうきん、早く校長先生に見てもらってこい」と先生にいわれた三郎君は、毎晩日本海くらいも寝小便をするというやんちゃ者をゾロゾロひきつれて、私のところへどうきんを見せにきました。私も嬉しくてたまりません。何万円出しても買えないようなどうきんをひろげ、やんちゃ者たちにとりまかれていた三郎君を写真に写してやりました。

写真ができあがって持ち帰ってから、三郎君は席について勉強するようになりました。掃除をがんばるようになりました。

まもなく五月に入りました。子どもの日を記念して、学校では、校内運動会をやりました。これまで運動会があっても、三郎君は走るのが遅いものですから、走らねばならぬ時には、頭が痛いとか足が痛いとかいって一度も走ったことがありませんでした。その三郎君が、このときには、死にもの狂いで走ったのです。成績はビリから数えて二番目でしたが、先生はとんでいって「きょうの一番よりねうちがあるぞ」と励ましてやってくれました。

ますますがんばりやになった三郎君でしたが、ある晩高熱を出して苦しみはじめ、朝になっても熱が下がりませんでした。でも、三郎君は「先生の顔も見ずに寝てなんかおれるかい」と、みんながとめるのを振り切って学校にとんできました。異常な顔つきに気がついて、先生が熱を測ってみると三十八度もありました。びっくりして家へ送り届けてやってくれたのですが「これで先生の顔をみてきたわい」と叫ぶと、身を投げるようにして蒲団の上に横になったといいます。三郎君もほんとは悪い子ではなかったのです。

悪い子だけが悪いのではなかった

優君は、やればできるはずの子なのに勉強しようとしません。お掃除の時間になっても怠けています。誰が注意しても「かまうな」「ほっとけ」「勝手」といつて注意を聞き入れようとしません。それで、学級委員の洋子ちゃんがそのことを作文に書きました。その作文は「優ちゃんさえやる気になってくれたら、私たちの学級は日本一のいい学級になれるのに」と結んでありました。

受持ちの井上先生はそれをガリ版に切ってみんなに配りました。すると「ぼくが注意したときも聞いてくれなかった」「わたしが注意したときも“かまうな”“ほっとけ”“勝手に”と聞いて聞いてくれなかった」という意見がいっぱい出てきました。そして「優君、どうして君はぼくらのいうことが聞けないんだ？」と責めました。でも優君は、何も言おうとしません。

先生には、優君の表情から、言いたいことがいっぱいあるのにそれを言うことのできない気持ちがわかってきました。それで「言いたいことがあったら書いてみ」といつて紙を渡しました。作文なんか大嫌いな優君でしたが、西洋紙二枚にぎっしり書いてきました。それには、赤ちゃんの頃から、よその子はオムツがとれてもとれなかったこと、幼稚園に入園してからいつもパンツがぬれたこと、他のみんなから「しょんべんこき」「くーさいぞ」といじめられたこと、いじめられないように家にとじこもっているときが白くなり、体が太ったこと、みんなから「白豚」「白豚」といじめられたこと、「白豚を怒らせる遊びをしようや」と、履物や持物をかくされたこと、腹を立てると「白豚が怒った」「白豚が怒った」とはやしたてられたこと、もうお前たちのいうことなんかきいてやるか、いつかこのうらみを晴らしてやるぞと思わずにおれなかったことが、ぎっしり書かれてありました。



先生はそれをガリ版に切って配りました。みんなびっくりました。優君をそういう子にしていたのが自分たちであったことがわかったからです。「優君、ごめんなさい」「優ちゃん、ごめんなさい」「優ちゃん、ごめんなさい」「優ちゃん、ごめんなさい」で、偉そうに注意したりなんかしてごめんなさいと、みんな優君にわびました。優君もじっとしておれなくなり、泣きながらみんなの前へ出ると「みんなぼくのことをそんなに考えてくれてありがとう」と、お礼を言いました。

いちばん喜ばれたのはお母さんでした。工場へ通うのを二時間もおくれ、「親でもどうしてやることもできなかったのに、皆さんのおかげで、優がいきいきと登校するようになりました」と、学級のみんなに手紙を書きました。

子どもたちはびっくりました。優君だけでなく、優君のお母さんたちを苦しめていたのも自分たちだったと気がついたのです。子どもたちは「優君のお母さんごめんなさい」「お母さんごめんなさい」と手紙を書きました。お母さんが感激してまた手紙をくくださる。先生がそれを印刷して配るものですから、「優君が怠けているのになぜ家の人は注意しないのだ」と、問題をひとごとと考えていたお父さん・お母さんたちも、自分たちの責任を感じるようになりました。悪い人だけが悪いのではなかったのです。

川にそって岸がある

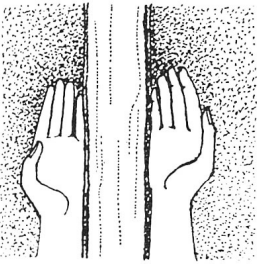
「モリタミツ」という女の子がいました。四年生でしたが字は一字も覚えてはいませんでした。自分の名前さえ読めず書けないという女の子でした。私は担任になったとき、ミッチちゃんにも、自分の名前くらいは読めるように、そして書けるようにしてみせるぞという願いをたてました。当時は片仮名先習の時代でしたから、先ず「モ」から始めました。「モ」を覚えてくれたら次は「リ」、その次は「タ」……と、一段一段、階段をのぼっていくようにやればできるはずだと考えたのです。

ところが、最初の「モ」で困ってしまいました。三日続けても一週間続けても十日続けても覚えてくれません。気の短い私です。かんしゃく玉が爆発しそうになるのを我慢して1ヵ月続けてみましたがだめでした。「負けるものか、根気比べだ」と自分を励ましながら二ヵ月続けましたがやはりだめでした。

三ヵ月目にはいったある日、他の子どもたちのために「馬」という漢字を黒板に書き、「バカバカお馬さん」の短い即席童話を話して「馬」を教え、それを終ってミッチちゃんのところへいきました。「モ」を教えるためでした。でも彼女は私の手もとなんかふり向いてくれません。「ミッチちゃん、こっちを向いてくれんかい、これが“モ”だよ」と、無理に「モ」に注目させようとしたとき、「せんせい、あそこを書いてあるの『バカバカお馬さん』の“ウマ”という字ですな」というのです。「ミッチちゃんが字を覚えてくれた、字を覚えてくれた」と叫びながら、私はこおどろしていました。そして気がついたのです。私は「仮名は一年生の字だ、やさしい字だ。漢字はむずかしい字だ」と思い込んでいたのです。ところが、漢字の方が親しみやすいやさしい字だったのです。仮名は味もそつけないむずかしい字だったのです。文字の歴史も考えてもそうでした。

でも、ミッチちゃんに必要なのは仮名です。イロハ四十八文字が身につけば一応の思想表現もできる仮名です。問題は、その仮名をどう教えるかです。

私は彼女のノートに「モリタ」と書いて「これあんたの字だよ」と教えました。翌日私が教室にはいるとミッチちゃんがどんできました。そして「せんせい、これ、わたしの字ですな」と、前の日に書いてやったのを示してくれるではありませんか。一度で覚えてくれたのです。でも、「モ」「リ」「タ」と解ったわけではありませんでした。「モリタ」は一字だと思っているのです。気がついて調べてみると、彼女はまだことばを「音」に分析してとらえる力をもっていませんでした。そこで「モ」や「リ」のつくことば集め、しりとり遊びをやっているうちに、ことばを音に分けて考えることができるようになりました。数は三つまでしか解らず、それ以上は「たくさん」でしたが、カルタ遊びをやっているうちに、「他の子はたくさん」で「わたしは少ない」ということで落着き、とうとうその年のうちに仮名を全部覚えてくれました。



阿弥陀さまのご本願が、私一人に寄りそってできあがって下さり、岸が川の流れにそってできているように、子どもひとりひとりのいのちの流れに寄りそって指導の岸を作っていかなければならないのに、私は私の作った岸に流れをねじ曲げようとしてミッチちゃんを苦しめていたのです。

身自らこれに当たる代る者あることなし

私が師範学校に学んだ二年生の夏でした。漢文の先生が「論語でも孟子でも何でもいいから、漢文の本を一冊読み通してこい」という宿題をお出しになりました。でも私の家は貧しくてそんな本は一冊もありません。先生は無理をおしやると思ったのですが、いいことを思いつきました。私の家は貧乏ですが寺です。お経があります。「お経だって漢文だ、お経を読もう」と考えついたのです。



『大無量寿経』から始めたのですが、たいへんなことばにぶつかりました。「独来独去無一随者」ということばでした。「独り来たり、独り去り、一の随う者なし」と読んだとき、私は一生懸命「たいへんだ、たいへんだ、こんなにくくさん人間がいるのに、いよいよよとなつたらひとりでぼつちなんだ。たいへんだ、たいへんだ」とつぶやき続けていました。すると小学一年生に入學したばかりの五月に亡くなった母の最期の呼吸の音までが鮮やかに甦ってきて、いよいよ私をたまらない思いにしてみました。「たいへんだ、たいへんだ」と読み進むと、さらにまたたいへんなことばにぶつかりました。「身自當之 無有代者（身自らこれにあたる。代る者あることなし）」ということばでした。人間はみんなひとりひとり、そのたいへんさを自分で背負って生きる以外ないのです。親子の間でも代って生きることばできないのです。

この夏、あるお父さんが訪ねてくれました。娘さんがあるのですが、生まれたときわずかに見えていた肌のアザが、だんだん大きくはつきりしてくるということです。あちこちの有名な病院に連れて行って治療を受けても少しも効き目が現われてくれないということです。娘さんはだんだん沈みこんでしまっています。お母さんが心配のあまり日記を見られると、毎日「死」のことが書いてある。「こんなわたしをなぜ生んだのか」と両親をうらむことばが書きつらねてあるということです。

私は「これだけ医学の進んだ今日です。断念せずになお治療の道を求めてください」と勧めるとともに「人生は苦です。みんなそれぞれがそれぞれの苦を背負って生きているのです。親子の間でも代ることはできないのです。この人生のきびしさを親子ともども聞きひらき、『アザをもって生まれたおかげで』と、アザが拝めるくらいいの人生をとともに求めてください」と、山口県の木村浩子さんのことをお話ししました。

木村さんは生まれて間もなく脳性マヒに罹り、両手両足が動かなくなってしまうわかれたのです。（左足だけがわずかに動く）その上三歳のときお父さんが、十三のときお母さんが亡くなりました。両手両足が動かない。両親もない。便所へも行けません。誰かに連れて行って貰っても、後の始末もできません。女の子としてどんなにつらかったことでしょう。「手洗いに人の手借りず行くまでは食を断たんと思ひしことあり」と詠んでおられます。もちろん学校へも行けません。「わが思い伝えんねがい左足に鉛筆はさみ文字書き習う」「不就学嘆かず左足に辞書めくり漢字暗記す雨のひと日を」「左足に米とぎ炊ぎ墨をすり絵をかきて生くひとすじの道」木村さんのお歌です。しかも「生かされてきた私ですからご恩返しを……」と、左足でおかきになった絵の収入の中から、毎月、体の不自由な方のために拠出されているといいます。

「モンジャヤツテヤジャナイ」

私の町に安井栄次さんという方がありました。あるとき、

先生、わたしは若い頃養蚕教師をやっておりました。毎年、秋田県あたりまで出かけたものです。あちらの方はことばが違います。養蚕農家を一軒一軒回っていくわけですが「今日は」と言っているといくと「モンジャヤツテヤジャナイ」という。どうもわけがわかりません。次の家でも「今日は」というと「モンジャヤツテヤジャナイ」という。私は、これは「今日は」ということをこういうのにちがいないと思いました。それで、次の家へいくとき「今日は」の代りに「モンジャヤツテヤジャナイ」といいながらはいっていったのです。すると家中の者がみんな妙な顔をしております。これはどうもおかしいぞと思ったものですから、その小学校に行つて校長先生にそのことばの意味を尋ねてみました。すると、それは「たいへんとり散らしておりまして失礼します」というわけだとおつしやるのです。客を受ける側ということばを客の方が言つたものですから、みんな妙な顔をしたのです。えらい失敗をしましたわい。

と、その失敗談を聞かせてくださいました。

さて、これは、教育する者にとつてもしつかり考えてみなければならぬことです。私たちは、親であること、教師であることの權威に依りかかつて、自分の問題点にしようともしないで、子どもの問題点を「モンジャヤツテヤジャナイ」と責めがちです。それでなくても、私たちの目は「他の非」はよく見えるのですが、自分の非はなかなか見えません。ですから、どうしても他罪主義に陥りがちです。そうならないためには、日の光も月の光も射し込むことのできない私の内面を照らす光——起日月光——にめぐりあう以外ありません。この光にであつたとき、はじめて、自分の姿を「モンジャヤツテヤジャナイ」といわずにおれなくなるのです。



ある日、敏雄君のお父さんが家へ帰つてこられると、三年の敏雄君がお仏壇に供えてあつた金を持ち出して買い食いをしたとお母さんが報告されるのです。お父さんはそれを聞くと、「これからバケツに五杯水をぶつけてやる」といわれ、敏雄君をすつ裸にしてしまわれたのです。でもそのとき、ハッと、そういう子どもを育ててしまつていた自分に気がつかせてくれる光が走りました。そこで「お前をそういう子にしたお父さんにも責任がある。だからお父さんも五杯水をかぶる」と、ご自分もバケツ一つになつて敏雄君を池の傍にだきかかえていきました。そして池の水を割り、先ずお父さんが水をかぶり続けられるのです。ところが、そのとばかりを避けようともせず、必死の顔で敏雄君はお父さんを見つめています。その敏雄君に気がつくとお父さんもちかかえて風呂場にかけて込み、乾いたタオルで敏雄君の体をこすりはじめられました。同時に敏雄君もお父さんの脇腹をゴシゴシこすりはじめました。お父さんはもうたまらなくなつて、男泣きに泣きながら敏雄君をだきしめてしまわれました。そのお父さんの腕の中で、敏雄君も、二度と再びこのいいお父さんを悲しませるようなことはしないぞと、泣きながら心に誓つたといひます。

スイッチを入れなければ灯はともらない

その日は、朝から蒸し暑い日でした。子どもたちにも暑気ありません。こういう日の授業くらいやりにくいものではありません。

その日、私は、受持ちの五年生の子どもたちに「三けたの掛け算」を教えることにしていました。「きようは、三けたの掛け算を勉強するんだが、できる者いるかい？」と切り出したのですが「そんなものへっちゃらですわ、二けたのと同じですわ」と答える声までたるんでいます。

私はとっさに、いいことを考えつきました。「先生はずいぶんむずかしいと思うんだがな。そんなにやさしけりや、きようはみんなが先生になって、先生に三けたの掛け算を教えるもうことにする」と言って、子どもたちをみんな前へ出してもらいました。そして、私一人が子どもの席に着きました。

「それでは、東井君、教科書の一番始めの問題を、前へ出て黒板にやって見い！」と命令したのは組一番のやんちゃ者N君でした。私は「はい」と返事をして前へ出ると、黒板に次のように書きました。

8	4	2	4	6	2
3	1	2	5	3	6
2	3	2	9	6	6
2	2	1	9	6	8
×					2

「おい、君、ちがうぞ！」「おい東井君ちがうぞ！」「下の計算はゆがめて書かないとだめじゃないか！」子ども先生たちは口々に申します。そこで私も申します。「でも、先生たち、まっすべの方が倒れないからいいです。新なんかでも、ゆがめて積むと倒れてしまいます」

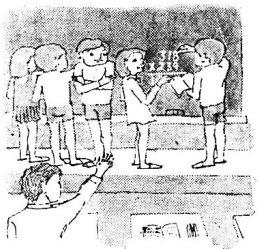
「バカだな、新はまっすべの方がいいが、掛け算はまっすべ積んではいけないんだ」

「なぜいけないんですか。算数だって、キチッとやった方がいいと思います」

「掛け算はゆがめて積むことになるとるんだ！」

「なぜゆがめて積むことになっているんですか？」

「ほんとに困った子だなあ、もうーぺん幼稚園からやり直してこい」「こういうようにやるんだ、よう見とれい！」と癪癪を起こして、模範的なのをやって見せてくれたのはN君でした。



「N先生、ぼくの方がきれいです」

「字は下手でもこういうように、下の計算はゆがめてするんだ」

「なぜゆがめてするんですか？」

「ほんまに、ほんまにどういうたらわかるんだい！ 隣の木戸先生を呼んで来ようか？」

「先生たちは隣の先生のお助けをいただかないと、三けたの掛け算をよう教えんですか？ぼくは、先生たちももっと勉強してきてほしいと思います」と追求するものですから、子ども先生たち、グウの音も出なくなっていました。

そこで、正規の先生と子どもの関係に形を戻し

$$318 \times 234$$

$$= 318 \times 4 + 318 \times 30 + 318 \times 200$$

の論理をうなずかせ、

$$\begin{array}{r} 318 \\ \times 234 \\ \hline 1272 \\ 9540 \\ 63600 \\ \hline 74412 \end{array}$$

↓

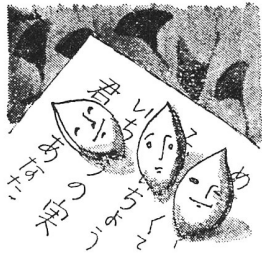
$$\begin{array}{r} 318 \\ \times 234 \\ \hline 1272 \\ 954 \\ 636 \\ \hline 74412 \end{array}$$

の計算方式になることを納得させたことでした。子どもたちの目は蒸し暑さなんか忘れたように、いきいきと輝いていました。それは、目にも耳にも、体中に灯がともっている感じでした。

仏様のお慈悲には「慈」「悲」「喜」「捨」の四つのおはたらきがあると聞いています。この四番目の「捨」のきびしさにであわないと、人間の心にはスイッチがはいらず、灯がともらないということを、教育の上にも味わわせていただきたいと思います。

いちようの実のお年玉

中学校では、農園会計の中から、お正月にりんごか何かのお年玉をやることになったそうだと聞いてきた職員がありました。中学校の生徒がお年玉をもらうのに小学校の子どもにお年玉がやれないなんて、こんなさけないことはありません。でも、小学校には、お年玉のやれるような会計はどこにもありません。お金を違わずにやれるお年玉はないだろうかと、全職員に考えてもらったのですが、何をするにしてもお金がかかります。考えてもいい思案が浮かびません。



途方に暮れて職員室の窓を見たとき、運動場の大いちようが「わたしがここにいるではありませんか」と、大声で呼びかけてくれている気がしてハッとしました。「いちようの実をやろう!」と私か叫ぶと「ああ、それがいい!」とみんなも叫んで賛成してくれました。「校長先生、担任の手で、いちようの実に子ども似顔絵を描いてやりましょう!」といってくれた職員がありました。「それはすばらしい!」と今度は私が叫びました。

「ひとりひとりの子どもへの担任のねがいを手紙に書いて添えてやりましょう」といってくれる職員がありました。「それでは校長のねがいも手紙に書きますから一緒に添えてやってください」と頼みました。「運動場のあの大いちようも、昔は一粒のいちようの実だったんだ。こんな小さいいちようの実なんだが、運動場の大いちようみたいになつてみせるぞと、芽が出たくて芽が出たくて、ウズウズしているめでたくてめでたくて仕方ないこのいちようの実。いちようの実に負けないように君もあなたもがんばっておくれ」という意味の手紙を私は書きました。

似顔絵を描いたいちようの実は、担任の手紙・校長のことばと一緒に封筒に入れ、封をしてもらいました。封筒の表には「めでたくてめでたくてしかたのない袋。家へ帰ってからお家の皆さんといっしょに開いてください」と書いてもらいました。

お正月、おめでどうの会に学校にやってきた子どもたちは、ひとりひとり、担任からこの封筒をもらいました。封筒を太陽に透かしてみる子、指で確かめる子「始だ」「いや肝油だ」子どもたちは、ロクに叫びながら帰ってくれました。

いちようの実のお年玉は大反響を呼びおこしました。どちらが立派になるか競争だというので庭に植えた家庭もありました。「アパート住まいで植える場所がありません」と鉢に植えた家庭もありました。転々と里親を変えられてきた里子の女の子は「運動場の大いちようだっていろんなことであつてきたんでしょ。私も負けません」と腰さげに見せにきてくれました。

いちようの実のお年玉は、親ごさん方にもお年寄りにも大きな反響を呼んだようでした。「自分たちの植えたいちようが、孫たちのためにこんなすばらしい励ましの力になってくれるなんて……」という、お年寄りの手紙が幾通も届いてきました。

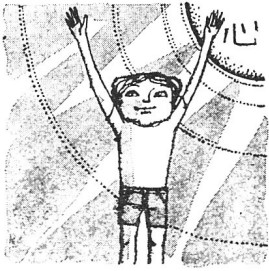
そればかりではありません。次の年から家庭のお年玉が変わり始めました。「学校とあなたの心をピカピカにみがいてください」という「ぞうきんのお年玉」、「注意されたと

き、ふくれつつらにならない年にならないかしら？」という「小さい貌のお年玉」「今年もお母さんをたすけてね」という「エプロンのお年玉」お母さん手縫いの「お年玉」等々。

太陽は夜が明けるのを待って昇るのではない

ある町の仏教会主催の中学生の集いにお話させていただいたことがあります。そのとき「観鸞という方が『世の中が末になると、川や海や空気などが濁ってくるばかりか、時代そのものが濁り、汚れ、そして人間が小さくなっていく』とおっしゃっているのだが皆さんはどう思うか」とたずねてみました。すると「鎌倉時代にすでに『時代が濁る』など、今の時代を見とおしておられるのには感心しますが『人間が小さくなる』というのはあたっていません。みんなお父さんお母さんたちより大きくなってきています」といった生徒がありました。みんな「そうだ」「そうだ」と同感の表情でした。私が「体だけはね」といったものですから、「あっ！ 心のことか！」と叫ぶ声も聞こえてきました。今の時代の子どもたちは、心ばかりか、生活全体がケチで小さくなってしまっているのではないのでしょうか。

女子中学生でも、下着の洗濯から食べるもの、食べることのすべてをお母さんにしてもらっているというのがずいぶんたくさんいます。これでは、オムツの洗濯も食べるもの、食べる用意、後の始末、すべてをしてもらってはかなりの赤ちゃんといっしょです。「カレーライスをつくってくれないと夕飯を食べてやらないぞ!」「そんなに叱るんだったら、高校入試、落ちてやるぞ!」と、自分のことである以外、誰のことでもありやうのないことまでを「ひとごと」にしている男子生徒もふえてきています。



ところが、過日もS県M市の民生部長さんが「軒に蜂が巣をつくっています。危険です。とってください」「近くに大きな青大将がいます。気味が悪いです。捕ってください」「蛙がやかましくて眠れません。何とかしてください」……というような電話が毎日のようにかかってくるというわけです。当然、自分たちで処置すべき事柄までも市役所の責任にしてしまおうとするケチなおとながぐんぐんとふえてきているとおっしゃるのです。どうやら日本は「小人の国」になりつつあるらしいのです。

朝鮮の子どもと日本の子どもの座談会するとき、司会の方が朝鮮の子どもに「君たちが日本にやってきて、一番強く感じたことはどんなこと?」と質問されたそうです。そのとき小学校五年生くらいの男の子が「日本の子どもは、何かを食べるとき、包み紙や食べかすをどこにでもポイポイ捨てています。なぜあんなことするのか、おかしいと思いました」という。「君たちの国ではそういうことしないの?」「なぜしないの?」司会の方がたずね返したとき、その男の子は「だって、だってぼくたちの国だもん」とつぶやいたといいます。日本海に向こうには、国までが生き方全体の上に生きているような「大きな子ども」が育てられているらしいです。

私たちの国にも「だって、私の家の仕事だもん……」「だって、ぼくらの学校だもん」というようなつぶやき方で、進んで仕事に挑戦してやっていくような「大きい子」を育てたいものです。そしてそのためには、おとなも「大きいおとな」になる努力をしたいものだと思います。太陽は夜が明けるのを待って昇るわけではありません。太陽が昇るから夜が明けていくのです。私たちも、日本にほんとうの夜明けをもたらせる大きな太陽になりたいものです。

あとがき

本書は、一九七七年から一九七八年まで『南御堂』新聞（当院発行）に連載されたものです。連載の内容が大変好評でありましたので、一九七九年に『仏さまの願いとお母さん』として出版され、以来十回版を重ねましたが、このたび再版いたしました。著者の東井先生はご承知のようにユニークな教育家として、また眞宗念仏者として知られる方でありましたが、一九九一年の四月十八日、七十九歳の生涯を終えられました。願わくは、本書が広く有縁の方々の開法求道の書として、愛読されることを切に念じ上げるものです。

二〇一二年九月

難 波 別 院

難波別院では、これまで月刊『南御堂』新聞に掲載されてきた様々な仏教の味わいを冊子化し、多くの方々の手に取っていただけるよう尽力してまいりました。

難波別院では、紙媒体として、「御堂叢書」と題したシリーズを発刊しております。その中に「御堂叢書の願い」として、

日常生活の種々雑多な問題に遭遇することによって苦悩する、その苦悩を機縁として教えに耳を傾けるところに、日々に新しく開かれていく往生道に立つ人間の誕生があるのです。

「御堂叢書」は、「願い」から生まれてきました。この世に生をうけた私たちが、「生まれた意義と生きる喜び」を確かめあって、共に往生道に立ち上がって行こうとの願いをもって。世に送るメッセージであります。

と綴られています。

御堂電子叢書は、その願いをもって、有縁の方々のお手元に仏教の味わいを届けるべく、また知っていただきたく配信するものです。願わくば御堂電子叢書が広く御同朋御同行の皆さまに親しまれ、ご愛読されることを切に念じ上げます。

最後になりましたが、このたびの電子書籍配信にお力を頂戴いたしました京都教区玄照寺住職の瓜生崇氏に厚く御礼申し上げます。

二〇一六年十月

眞宗大谷派 難波別院

※紙媒体の書籍をお求めの方は、**難波別院教務部（〇六・四七〇八・三二七五）までお問い合わせください。**

読者の皆さまへ

「御堂電子叢書」の中には、過去に紙媒体で発刊したものを電子書籍化しているため、一部現代には不適切と思われる表現がなされている箇所が見受けられます。しかし、あえて当時の内容のまま配信させていただきますのは、著者の原文を尊重することで、著者が本当に伝えたかったことを現代にそのまま届けたいという願いによるものです。

今から二十年前に起きたオウム真理教事件。その元信者が、どうして既存仏教に救いを求めなかったのかと聞かれて「お寺は社会の風景の一つでしかなかった」と答えたことは衝撃的でした。

寺に行けば仏教の教えが聞け、わかりやすく素晴らしい仏教書が手に入る。仏教教団というこの世界の中から見ると当たり前のことかもしれませんが、外から見れば決して当たり前のことはありません。

響流書房。この小さな出版社が目指すものは、仏教の教え、とりわけ淨土真宗の教えを、わかりやすく、安価で、手軽に、一人でも多くの人にお届けし、そして後世に残すことです。

そのために響流書房は電子出版という出版形態を選びました。紙に比べて格段に費用が軽減でき、在庫がないので無理をして売る必要がなく、絶版になる心配がありません。そして電子出版は若い人の持つ小さなスマホでいつでも読むことが出来ますし、文字が大きくできるのでお年寄りにも優しいのです。

皆さんのスマホやタブレットに、仏教の教えが響き流れ、人生のかけがえのない拠り所となることを願って。

二〇一四年九月二十八日

○浄土真宗の法話を聞いてみませんか？

法話と聞くと、堅苦しいんじゃないか、お寺と関係ない人が聞きに行ってもいいのかな？って思われるかもしれませんが。でも法話は本来だれでも自由に聞きに行ってもいいものでし、話をされている内容はすべて「私」と関係のある大切なことです。そして、何より法話というのは、楽しくあたたかいものなのです。

日本全国の自由に聞ける法話の予定を案内しているサイトがあります。よかったら一度ご覧になって、是非ご自分の近くの法座に足を運んでみてください。

浄土真宗の法話案内

<http://shinshuhouwa.info/>

(浄土真宗各派のボランティアスタッフによって運営される、全国の法話の情報を自由に掲載して、検索や閲覧ができるインターネットサイトです)

著者紹介

東井義雄（とうい よしお）

1912年 兵庫県に生まれる

1918年 姫路師範学校卒業

1972年 兵庫県八鹿小学校長退任 教員生活40年兵庫教育大学大学院講師並びに姫路学院女子短期大学講師を歴任 東光寺住職

1991年4月18日還淨 79歳

著書・『東井義雄著作全集』10巻／『根を養えば樹は自ら育つ』／『いのちとのであい』ほか

仏さまの願いとお母さん

著者 東井義雄

発行者 宮浦一郎

発行元 難波別院

大阪市中央区久太郎町四・一・十一

電話 ○六・六二五一・五八二〇

<http://minamimido.jp/>

発行所 響流書房

滋賀県東近江市御園町四四一 玄照寺内

電話 ○七四八・二三・四四〇〇

<http://kourushobo.com/>

誤字・脱字等ありましたらメールにてお知らせください。

kyoumu@minamimido.jp